

平成22年 5月 14日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2008～2009

課題番号：20830106

研究課題名（和文） 社会不安障害における潜在的連合の検討

研究課題名（英文） Implicit Association in Social Anxiety Disorder

研究代表者

大月 友（OHTSUKI Tomu）

早稲田大学・人間科学学術院・助教

研究者番号：20508353

研究成果の概要（和文）：

本研究は、人前で不安になる心理現象に影響を与えている、個人の認知メカニズムを検討することを目的とした。研究の結果、本人が自身のパフォーマンスを低く評価し、それに捉われる程度が高いほど、スピーチ中の不安感が強いことが示された。一方、潜在的に社会的場面と負の情動の結びつきが強い者ほど、スピーチ中の生理的反応が強まることが示唆された。このことから、認知の顕在的側面と潜在的側面は、異なる不安の様相と関連することが明らかにされた。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of the current study was to investigate the relationships between social anxiety and some cognitive factors. The results showed that individuals who gave low evaluations to own speech and focused attention to own speech performance were more anxious during speech task. On the other hand, individuals who had strong implicit associations between social situations and negative emotions showed high physiological responses. These findings suggest that explicit and implicit cognitions influence social anxiety separately.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,010,000	303,000	1,313,000
2009年度	1,160,000	348,000	1,508,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,170,000	651,000	2,821,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：潜在的連合、社会不安、Go/No-go Association Task

1. 研究開始当初の背景

1990年代から、社会不安障害の患者、あるいは、社会不安傾向の強い個人を対象として、その認知メカニズムに焦点を当てた実験研究が、精神医学・臨床心理学領域で多くなされてきた (Clark & McManus, 2002)。これらの研究の中で、個人の自覚を伴わないいわゆる“潜在的認知”も、反応に影響を与えることが近年の研究で指摘されており (e.g., Egloff et al., 2002) このような潜在的認知も含めた認知メカニズムの解明が必要と指摘されている。

これまでの社会不安障害を対象とした潜在的な認知構造に関する研究において、潜在的連合を対象とした研究がなされてきた。この潜在的連合とは、過去の経験によって自動化されている長期記憶内の概念間の結びつきとされている (Greenwald et al., 1998)。これらの先行研究では、質問紙で測定される社会不安の強さと潜在的連合には、必ずしも明確な関連性は示されていない (de Jong et al., 2001; de Jong, 2002)。一方で、行動指標や生理指標といった、質問紙以外の不安反応については、潜在的連合との関連性が近年示唆されてきている。これらの側面は、本人の自己報告に基づく顕在的認知では予測ができないことが指摘されており (Rachman, 2004) 潜在的連合を用いることは、社会不安の包括的な認知メカニズムの解明の一助になると考えられた。

2. 研究の目的

本研究は、認知の潜在的側面と顕在的側面に焦点を当て、それらが実際の社会的状況における個人の不安反応にどのような影響を及ぼすか検討を行い、潜在的認知と顕在的認知を含めた社会不安の認知メカニズムの検証を目的とした。

3. 研究の方法

(1) 実験協力者

27名の大学生を対象とした。

(2) 測定指標

潜在的認知

- ・ Social-GNAT: 社会的状況と負の情動との潜在的連合の強度を測定した。

- ・ Anxiety-IAT: 自己と不安との潜在的連合の強度を測定した。
顕在的認知
- ・ Speech Perception Questionnaire (SPQ) 自己評価版: スピーチのパフォーマンスに対する自己評価を測定した。
- ・ SPQ 自己注目版: スピーチ中の自己のパフォーマンスに対する注目 (捉われ) の程度を測定した。
- ・ 解釈バイアス得点: スピーチ中の自己のパフォーマンスの解釈のバイアスを、SPQ 自己評価版と他者評価版の差により数量化した。
スピーチ中の不安指標
- ・ 主観的不安 (Visual Analog Scale: VAS)
- ・ 皮膚電気活動 (EDA)
- ・ 心拍数 (HR)
- ・ SPQ 他者評価版: スピーチのパフォーマンスに関する客観指標として、ビデオを用いて他者評定を行った。
社会不安傾向
- ・ Social Phobia Scale (SPS): 個人の社会不安傾向を質問紙による自己評定で測定した。
- ・ Fear of Negative Evaluation Scale-Short Form (S-FNE): 社会不安障害の中核的特徴とされる他者からの否定的な評価に対する怖れを測定した。

(3) 手続き

実験は個別に行われた。実験参加者に対してインフォームド・コンセントを行った後、Social-GNAT・Anxiety IATの実施、SPS、S-FNEの記入、EDA、HRのベースライン測定 (4分間) スピーチの教示と準備時間 (2分間) スピーチの実施 (3分間: EDA・HR測定) 不安VAS、SPQ自己評価版、SPQ自己注目版の記入、ディブリーフィング、という流れで実験を行った。

4. 研究成果

(1) 潜在的認知と顕在的認知の関連

潜在的認知と顕在的認知の関連を検討するため、Social-GNAT、Anxiety-IAT、SPQ自己評価版、SPQ自己注目版、解釈バイアス得点の相関分析を実施した。その結果、顕在指標間に有意な相関が示されたものの、潜在指標と顕在指標の間には、相関関係は示されなかった。このことから、潜在的認知と顕在的認知は、独立した指標であると考えられる。

(2) 潜在的認知と社会不安の関連 Social-GNAT

社会的状況に対する潜在的連合と社会不安との関連を検討するため、Social-GNATを平均値により2群に分け、主観的不安、EDA、HR、SPQ他者評価版を従属変数とした分散分析を実施した。その結果、EDAとHRにおいて、有意な差が確認された(Fig.1・2)。この結果から、社会的状況語と負の情動語との連合が強い群は、スピーチ中のEDAはより強く生じ、HRはより低くなることが示された。それ以外の不安反応では、両群の差は確認されなかった。

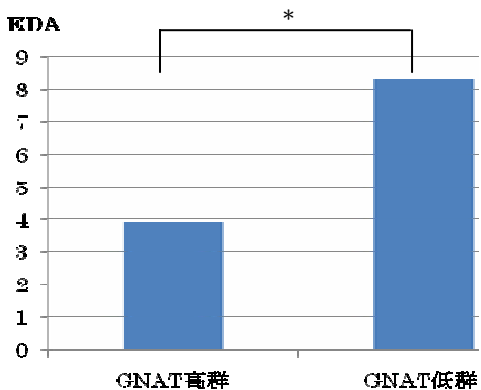


Fig.1 Social-GNAT と EDA の結果

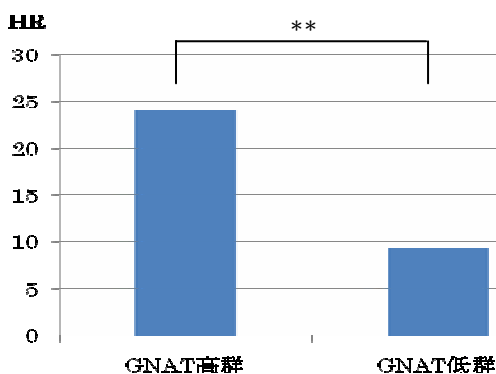


Fig.2 Social-GNAT と HR の結果

Anxiety-IAT

自己に対する潜在的連合と社会不安との関連を検討するため、Anxiety-IATを平均値により2群に分け、主観的不安、EDA、HR、SPQ他者評価版を従属変数とした分散分析を実施した。その結果、HRに関して有意傾向が示されたものの、全体を通して有意な差は確認されなかった。

(3) 顕在的認知と社会不安の関連

顕在的認知指標と社会不安の関連を検討するため、各指標間の相関分析を行った。その結果、SPQ自己評価版は主観的不安感($r = .53^{**}$)、SPQ他者評価版($r = .67^{**}$)と関

連を示したが、生理的反応との関連は示されなかった。次に、SPQ自己注目版は、主観的不安感($r = .54^{**}$)とのみ関連が示された。一方、解釈バイアス得点はすべての指標との関連は示されなかった。

(4) 認知指標と社会不安障害傾向の関連

各認知指標と社会不安障害傾向(SPS、S-FNE)との関連を検討するため、相関分析を行った。その結果、顕在的認知指標のいずれも、SPS、S-FNEとの関連が示された。一方、潜在的認知指標との有意な相関は確認されなかった。また、社会不安障害傾向とスピーチにおける社会不安反応の相関分析をしたところ、主観的不安感とS-FNEのみに有意な相関が示され、それ以外の指標間では確認されなかった。

(5) まとめ

本研究の結果から、顕在的認知(特に、自己のパフォーマンスに対する評価と捉われ)は、実際の社会的状況における主観的不安やパフォーマンスと関連することが示された。一方、潜在的認知は、それらの状況における生理的反応と関連することが示された。このように、認知を顕在的側面と潜在的側面で捉えることで、社会不安の包括的なアセスメントにつながる可能性が示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)
現在投稿準備中

〔学会発表〕(計4件)

Kishita, N., Ohtsuki, T., Kubo, A., & Shimada, H. Effect of Word Repeating Technique on Verbal Stimulus Function and Speech Anxiety. World Congress of Behavior and Cognitive Behavior Therapy, June 2-5, 2010. Boston, USA.
Suyama, H., Ohtsuki, T., Ito, D., Kaneko, Y., Nakazawa, K., & Suzuki, S. The effects of video feedback for social anxiety: Interpretation bias of their speech predicts response to video feedback of speech. World Congress of Behavior and Cognitive Behavior Therapy, June 2-5, 2010. Boston, USA.
巢山晴菜・大月友・中澤佳奈子・兼子唯・横山仁史・島田みなみ・鈴木伸一 社会不安傾向者に対するビデオフィードバックの効果、日本不安障害学会、2010年3月6日、大阪

大月 友 臨床心理学領域における
Implicit Association 研究の展開、日本
心理学会第 73 回大会、2009 年 8 月 2 日、
京都

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

大月 友 (OHTSUKI TOMU)
早稲田大学・人間科学学術院・助教
研究者番号 : 20508353